FROM United Kingdom

中野香織

⑱アメリカの王子様はイギリス男、の謎

お好きな俳優がクリス・クーパーとうかがってもすぐには顔が思い浮かびませんでしたが、「『アメリカン・ビューティー』の隣家の軍人」と聞いて「ああ、あの人が！」とようやく納得しましたよ。

印象が強烈なはずなのにほかの作品に出てもすぐにはその人とわからない「ああ、あの人が！」系の人、そういえばほかにもいます（単に人の顔に対する記憶力が低いだけ？）。最近、驚いたのは、ジョン・コーベット。「マイ・ビッグ・ファット・ウェディング」で全女性の理想かという花婿をやってますが、どこかで見たことがと思ったら、なんと「セレンディピティ」でケイト・ベッキンセールに捨てられるイギリス男のミュージシャン役で、さらにその前には「ディナーラッシュ」で観客の度肝を抜いたウォール街の証券マンだった。美男なのかそうじゃないのか、個性が強いのか薄いのか、判定を許さない妖しい魅力（か？）をふりまいている人ですね（今後チェック強化）。

その変身上手なアメリカ男コーベットでも、さすがにイギリス男を演じた時には無理がありました。独特のアイロニーないしシャイ加減がにじみ出ないと、イギリス男には見えん（思い込み、入ってます）。では、変身上手なイギリス男がアメリカ男を演じる場合はどうか？

わざとらしい話のもっていき方でごめん。ええもちろん、「メイド・イン・マンハッタン」でジェニロペ相手にアメリカの上院議員候補を演じるレイフ・ファインズと「トゥー・ウィークス・ノーティス」でサンドラ相手にアメリカ人大富豪役をやるヒュー・グラントのことです。ともにアメリカン・ラブコメの王道的映画ではありますが、だからこそ、なぜ王子様がイギリス男か？　便宜上、「変身上手」と書いたけど、ヒューときたらば、アメリカ人という設定にもかかわらずイギリス人しか言わない「ラブリー」なんてセリフを言ったりして、イギリスっぽさをあえて残している気がします。レイフも役柄上、貴族的な美男ぶりだけ求められたみたいな感じがありありで、〈イギリス男〉のまんま（英『ガーディアン』紙は、難度の高い演技を披露できないレイフを評して「虫歯と馬毛パンツの苦しみに同時に耐えているように見える」と）。

さらに今秋公開という六〇年代ニューヨークが舞台のラブコメ「恋は邪魔者」では、レニー・ゼルウィガーのお相手をユアン・マクレガーが務めていて、「アメリカの王子様はイギリス男」（ユアンはスコッツだけど）の傾向は続く模様。

この現象、どうご覧になります？

「マイ・ビッグ・ファット・ウェディング」
7月19日より丸の内プラゼールほか全国松竹・東急系にて

往復連載

ドーバー越えて

齋藤敦子
中野香織

カット・井上陽子

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来10数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。